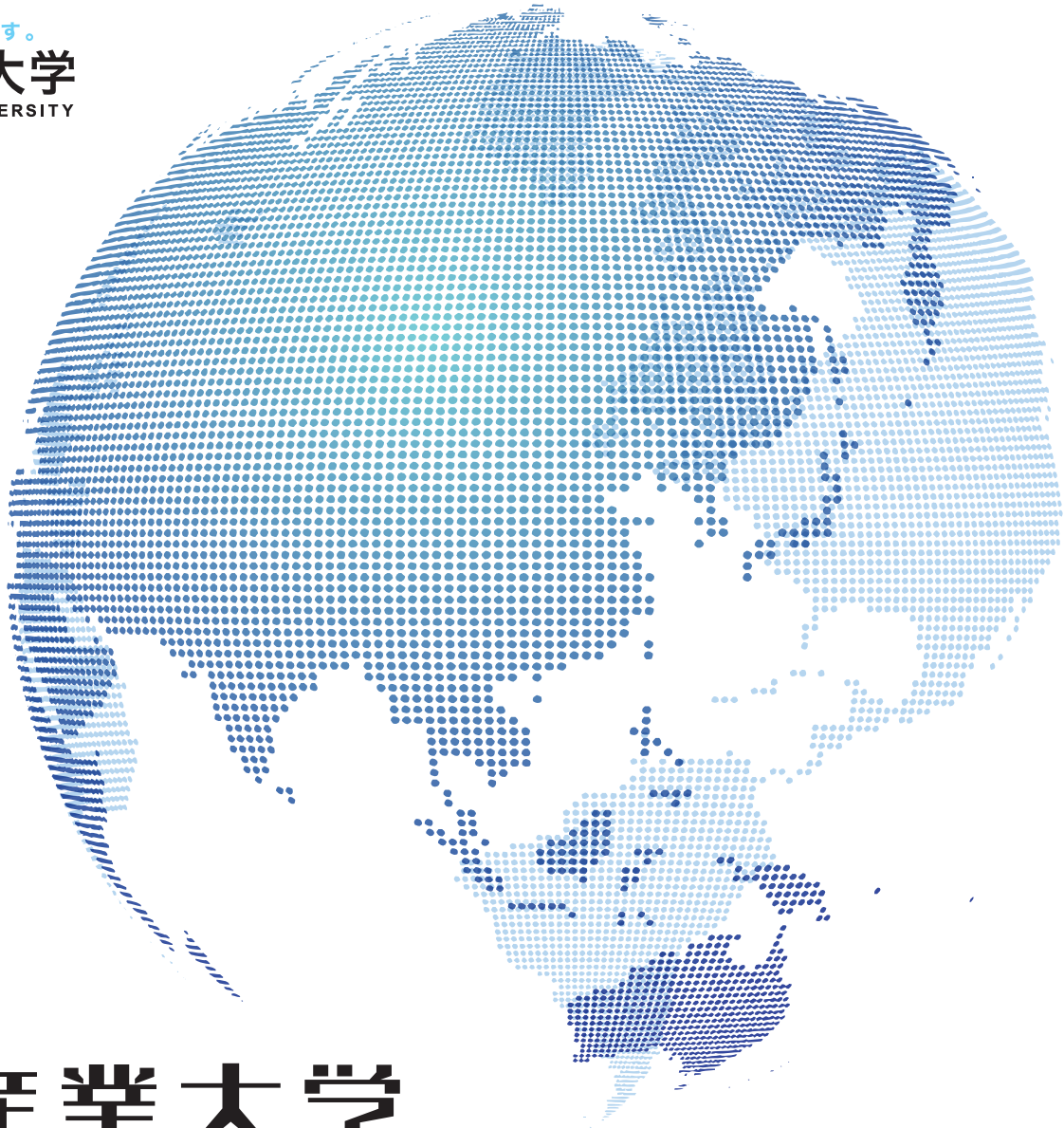
むすんで、うみだす。
京都産業大学
KYOTO SANGYO UNIVERSITY



京都産業大学 世界問題研究所 ニュースレター

2023. 10 Vol.10

NEWS LETTER

CONTENTS

特集

2022 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要 2

所長挨拶 4

講評 5

若泉敬記念基金について 7

【特集】

2022 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式

表彰式概要

2023 年 3 月 15 日（水）に、京都産業大学世界問題研究所主催の 2022 年度「若泉敬記念基金」懸賞論文表彰式がオンラインで開催されました。世界問題研究所の所員や関係者、懸賞論文の入賞者など 17 名が参加しました。

「若泉敬記念基金」懸賞論文は、長年にわたって世界問題研究所所長を務めた故 若泉 敬 教授の寄付をもとに設置された「若泉敬記念基金」の活動の一環として実施されています。本学の学生を対象に「今日の世界問題に関するテーマを各自で設定し、副題

2022 年度 世界問題研究所 若泉敬記念基金懸賞論文 入選者

（区分ごとに氏名の 50 音順）

二　席	
川満　拓夢さん （法学部・4 年次）	「軍用地取引と沖縄県経済」
雪丸　温翔さん （文化学部・3 年次）	「戦争への抵抗としての代議制―権力論を通して―」
佳　作	
池田　遼真さん （国際関係学部・3 年次）	「地球の寿命と再生可能エネルギー　再エネ大国ドイツの行動予測」
板坂　梨央さん （国際関係学部・4 年次）	「カンボジアの初等教育における教育と教師の質的向上―未来学から目指す課題解決―」
菅　右京さん （国際関係学部・4 年次）	「歴史の中のベラルーシ反体制運動―反ルカシェンカ政権運動の深層」
馬久地　あすかさん （現代社会学部・4 年次）	「食べ物を捨てる社会～日本とベトナムの比較研究～」
森口　颯太さん （国際関係学部・4 年次）	「ウクライナ侵攻後の抑止概念について　日本のとるべき防衛戦略」
山口　和華さん （国際関係学部・3 年次）	「今日の世界問題―援助を終わらせるための援助とは何か―」
吉馴　真汐さん （国際関係学部・4 年次）	「より良い国際開発に向けたサスティナブル・サプライチェーンの構築―ガバナンス・制度の視点から―」

※一席の該当者なし

をつけて論じる」という趣旨で論文を募集したところ、本年度は 18 篇の応募作があり、二席 2 篇・佳作 7 篇と過去最多の計 9 篇が入賞しました（一席は該当作なし）。

表彰式では世界問題研究所所員の岩本 誠吾 法学部教授が司会進行を務めるなか、所長の川合 全弘 法学部教授から所長挨拶があり、受賞者に対する祝辞の中で、「本来、『文化』の語源は “ 耕す ” ことにある。読み、書き、考えながら、吾が心田を耕すことだ。これこそ、人間にとって不可欠の言語能力を涵養し、想像力と創造性を開発し、精神的貧困を克服する身近な王道である。そしてまた、これこそ、教育の本質ではないだろうか」という若泉 敬 先生の言葉が紹介されました。

つづいて、二席の 2 篇について、所員の久保 秀雄 法学部准教授から、どのような点が高い評価を得たのか、詳しい講評がありました。また、佳作の 7 篇については、所員の中谷 真憲 法学部教授から、優れた点とさらなる研鑽を期待する点などについて、個別に講評が行われました。

そして、来賓である世界問題研究会 INC（インターネットクラブ）幹事の木野 正博 氏から、1966 年に創立され 2001 年まで本学文化団体連盟構成クラブとして存続した学生団体である世界問題研究会の歩みについてご紹介があるとともに、「研究会での研究活動が卒業後に勤務した総合商社で大いに役立ったので、学生の皆さんも今回の経験を糧に活躍してほしい」といったエールが送られました。

その後、入賞者一人一人から執筆時の苦労や受賞の喜びなどが語られました。入賞者からは「自分は沖縄出身者として、若泉先生のご恩に何らかのかたちで報いたかった。」「ゼミの先生から、文責としていい加減なことを書いてはいけないと指導され、一文一文を何度も読み直して繰り返し書き直した。文章を書くことの難しさを身にしみて感じた。」「大学院進学を考えているが、自分に自信がなかったので、第三者に評価して頂ける貴重な機会となった。」「現在進行形の出来事を追っていたので、どこで新たな情報を収集すればよいのか悩んだ。」「現地に渡航予定だったが直前にコロナのため中止になったので、代わりにオンラインでインタビューを行うなど工夫をし、そこが講評でも評価されたのが嬉しかった。」「外国語の専門的な文献を入手して翻訳し、専門外の人にも分かるようにかみ砕いて説明するのが大変だった。ゼミの先生にも相談して、色々とアドバイスを頂いた。」といった声などが、寄せられました。

最後に、インドに研究出張中だった所員の志賀

浄邦 文化学部教授から、若泉先生の「心田を耕す」という言葉に関連して仏教のエピソードが紹介され、「ブッダもまた、たとえ周囲から批判されようとも、心という田畑を耕すために努力を続けることは人間にとって重要な仕事の一つであり、それは自身のみならず他者の心を耕すことにもつながる、と説いています。これから皆さんも、自身と世界の未来像を描きながら耕した心田に何らかの種を蒔いてみてください。時間がかかるかもしれませんが、必ずやその種は発芽し、将来色とりどりの大輪の花を咲かせてくれると思います」とのコメントが寄せられました。

また、ベトナムの大学で講義があり当日は参加できなかった加藤 敦典 現代社会学部准教授からは、「「世界」はひとつであると同時に非常に広く、私たちの日常からは想像できないような事態も日々進行しているように思います。受賞者のみなさまの研究はそれぞれのかたちで、このことを改めて認識させてくれているように思いました。」といったメッセージが寄せられました。

所長挨拶

開会に際しまして、ひとことお祝いのご挨拶をいたします。

きょう私は、受賞者の皆さんに是非ご紹介したいことがあります。それは、かつて本学に存在した、世界問題研究会という、学生団体のことです。世界問題研究会は、世界問題研究所が設立されたのと同じ 1966 年――本学創立の翌年――に設立され、本学文化団体連盟構成クラブとして 2001 年まで存続しました。その間、同研究会は『世界問題』と題する機関誌を合計で 29 号発行しました。世界問題研究所が教員の研究組織であるとすれば、世界問題研究会は、それと同志的関係に立つ、学生の研究組織であったわけです。

実は私はつい最近まで世界問題研究会の存在を迂闊にして知りませんでした。昨年、たまたま同研究会 OB 組織の幹事を務められる木野正博氏と出会い、同研究会の歴史について初めて教わり、それを通じて私なりに思うところが多々ありました。氏は、本学の 5 期生ですから、皆さんにとってはちょうど半世紀前の大先輩にあたります。実は木野様にはこの表彰式に来賓としてオンラインでご参加いただいています。のちほどご挨拶を頂く予定です。私からは、私が世界問題研究会との出会いを通じて得た教育論的な感想をお伝えし、祝福のご挨拶に代えたいと思います。

私が得た感想を一言で要約するならば、学生時代の研鑽がいかに大事か、特に本を読み、ものを考え、文章を書くことが、人生の土台を築く上でいかに大切であるか、ということです。実は昨年秋に世界問題研究会の同窓会が京都で開かれた折に、招待を受け、私も参加させていただきました。そこに集ったのは、みな 60 歳代から 70 歳代の方々です。この方々は、50 年前には、ちょうど今の皆さんと同じ若い学生として、「世界問題」という壮大な主題と取り組み、その思索の成果を何とか文章に表そうと奮闘努力していたわけです。その方々が半世紀後に同窓会に集って、かつての世界問題研究会での活動を懐かしく語り合っておられる。卒業後の分野や立場は様々ですが、どの方も、世界問題研究会で培った志を大切にし、それを糧とも励みともして生きてこられた。そして学生時代の志のままに、銀行や商社、行政や教育の現場で、海外で、地元で、家庭で、活躍してこられた。その人生のまっすぐな道筋が私のような部外者にもよく感じ取られる、実に感慨深い会合でした。

私が何を言いたいかは、賢明な皆さんにはもうお分かりのことと思います。ビフォー・アフターというと少し語弊がありますが、言わば 50 年前の世界問題研究会の学生たちは今の皆さんです。今の皆さんの 50 年後の姿が世界問題研究会の同窓生の方々です。懸賞論文と熱心に取り組んだ皆さんの努力、世界問題という主題との真剣な格闘は、きっと皆さんの心を深く耕したことでしょう。その研鑽努力は、本日の受賞という小さな結果に止まらず、必ずや 10 年後、20 年後、50 年後に皆さんの大きな社会的実証の姿となって現れることと確信いたします。

かつて若泉敬先生は「読もう、書こう、考えよう」と題した文章の中で、人格形成にとっての、「読み、書き、考えること」の重要な意義を指摘されました。最後にその一節を引用し、皆さんへの祝福の辞といたします。曰く、「本来、『文化』の語源は“耕す”ことにある。読み、書き、考えながら、吾が心田を耕すことだ。これこそ、人間にとって不可欠の言語能力を涵養し、想像力と創造性を開発し、精神的貧困を克服する身近な王道である。そしてまた、これこそ、教育の本質ではないだろうか」。

以上です。本日はまことにおめでとうございます。

世界問題研究所長　川合 全弘

講評

■二席

法学部法政策学科 4 年次生

川満　拓夢

「軍用地取引と沖縄県経済」

本論文は、沖縄の軍用地問題を、これまでよく見られた政治的な切り口からではなく、軍用地代の上昇を見込んで沖縄県外からも参入者が相次ぎ近年加熱している不動産取引という切り口から取り上げ、その実態と様々な経済効果や危険性を、丹念な文献調査のみならず自ら行ったインタビュー調査にも基づいて詳らかにしている。そして、軍用地の自治体による買い取りや地代の支払制限が、マクロ的にもミクロ的にもバブル崩壊を防ぐ解決策になるとの政策提言を行っている。軍用地という研究対象はもちろん、経済政策的な研究アプローチもユニークであるが、だからといって奇をてらうような議論をしているのではなく、綿密な情報収集に基づいて緻密な分析が行われており論証も秀逸であった。

■二席

文化学部国際文化学科 3 年次生

雪丸　温翔

「戦争への抵抗としての代議制―権力論を通して―」

本論文は、権力に関する哲学的アプローチに基づいて、戦争に抗する統治体制となりうる代議制のあり方を探究している。具体的には、カントの平和論を参照しつつ、シモーヌ･ヴェイユやジョルジュ･アガンベンの理論を中心に権力者が存在する限り戦争が無くならないと考えられることを示し、ミッシェル・フーコーに加えてスピノザの理論からその

解決策として単なる代議制ではなくどのような代議制がふさわしいかを探ろうと試みている。名だたる哲学者・思想家たちの難解で知られる著作を自分なりに何とか読み解いて、「戦争と平和」という大問題の解決に果敢に挑戦しようとする非常に意欲的な取り組みが高く評価された。

■佳作
国際関係学部国際関係学科 3 年次生
池田　遼真
「地球の寿命と再生可能エネルギー　再エネ大国ドイツの行動予測」
　再生可能エネルギー普及を進めてきたドイツでなぜ原子力や天然ガスへの揺り戻しが起きているかを考察した論文。ケネス・ウォルツの視点や ESG 投資の厳格化動向をきちんとふまえた上で最終的には「国際社会の中での立ち回り」の側面をうまく摘出し整理する手堅さが光った。現在進行形の事態によく伴走しており、良い意味で記者的な素質を感じさせる。

■佳作
国際関係学部国際関係学科 4 年次生
板坂　梨央
「カンボジアの初等教育における教育と教師の質的向上―未来学から目指す課題解決―」
　カンボジアの初等教育改善への道を考察した論文。歴史や財政面を含め同国の初等教育の現状を取り巻く問題構造を整理したうえで、自ら Facebook 上でインタビューを実施（3 名）した積極性が良い。日本の教育番組の二次活用の提言は興味深い。日本側についての調査も組みこむとなお良かった。

■佳作
国際関係学部国際関係学科 4 年次生
菅　右京
「歴史の中のベラルーシ反体制運動―反ルカシェンカ政権運動の深層」
　ベラルーシという国のアイデンティティの希薄さについての指摘から入り、ロシアとの関係においてウクライナと対照させつつ、ではなぜ親ロシアの同国における反体制運動に大衆化の傾向があるのか、という興味深い考察を行っている。ナショナリズム運動と見ることは適切でないとするまでの歴史文化論的な手さばきはややジャーナリスティックだが、反面よくまとまっており最終的に高い評価を得た。

■佳作
現代社会学部健康スポーツ社会学科 4 年次生
馬久地　あすか
「食べ物を捨てる社会～日本とベトナムの比較研究～」
　ベトナムにおけるフードロスの問題について、日本と比較しつつ原因分析や意識の差についての考察に取り組んでいる。サプライチェーン上における構造的な問題を適切に指摘しているだけでなく、日本人（7 名）・ベトナム人（15 名）に対してアンケートを行い、考察を深めていった過程に誠実な探求の姿勢がうかがわれた。

■佳作
国際関係学部国際関係学科 4 年次生
森口　颯太
「ウクライナ侵攻後の抑止概念について　日本のとるべき防衛戦略」
　ロシアによるウクライナ侵攻という現在進行形の衝撃的な事態の下、日本のとるべき防衛戦略について、抑止力の議論あるいは拒否戦略の議論など、既存の重要な理論を援用して考察している。論点をよく整理し、軍事を論じる際にありがちな勇ましい極論を排して最後まで冷静に論じ切った好論文であった。4 年次生だが今後も発展させてほしい研究である。

■佳作
国際関係学部国際関係学科 3 年次生
山口　和華
「今日の世界問題―援助を終わらせるための援助とは何か―」

先進国が援助政策を取る理由についての整理から入り、日本のODAの分析を経て、援助を終わらせるための援助のあり方について考察している。この研究分野でもっとも根底的な問題に切り込んだ姿勢は大いに買えるものである。援助政策と国益との絡みあいを指摘して終わりにするのではなく、判断基準に優先順位を設けることを提唱しその具体的なやり方をも提示できている点がよかった。

■佳作

国際関係学部国際関係学科4年次生

吉馴　真汐

「より良い国際開発に向けたサスティナブル・サプライチェーンの構築－ガバナンス・制度の視点から－」

3年次の研究を着実に発展させており、まずそこに研究に対する真摯な姿勢を感じる。制度がサスティナブル・サプライチェーン構築に及ぼす影響を韓国やEUを例に的確に論じ、また新冷戦とも呼ばれる国際政治動向にも目配りが出来ている。アセモグル／ロビンソンの理論やガルトゥングの理論をふまえた上での学術的な論じ方が出来ており、人権や環境を巡るEUのデューデリジェンスやフレンドショアリングなどの論点をおさえて立論した点も手堅い。研究者的資質と研究の発展可能性を感じる。

以上

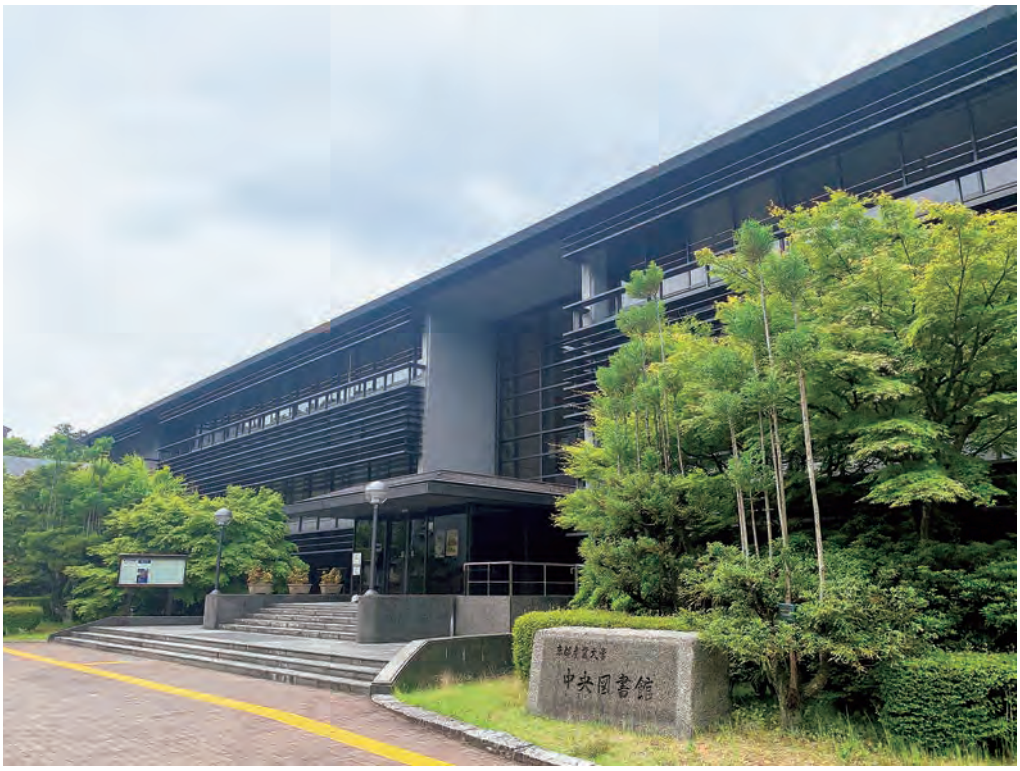
世界問題研究所長　川合 全弘

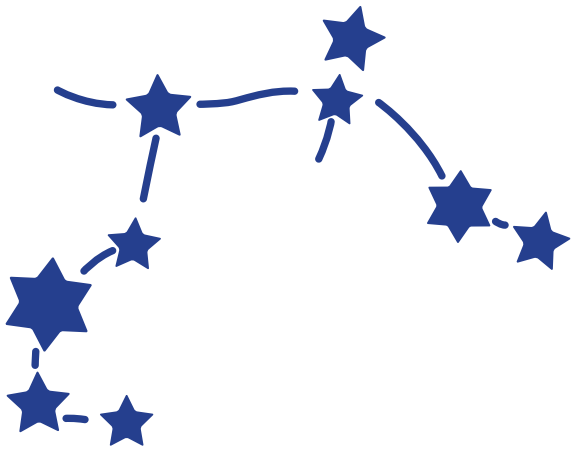
同研究所員　中谷 真憲

同研究所員　久保 秀雄

若泉敬記念基金について

若泉 敬（わかいずみ けい　1930–1996年）国際政治学者。東京大学法学部を卒業し、ロンドン大学やジョンズ・ホプキンズ大学に留学。1966年に本学教授として招聘され、同年世界問題研究所所員となり、1970年から1980年まで同研究所所長を務める。1992年退職時には退職金の全額を同研究所の活動資金として寄付。同研究所では2001年にこれを「若泉敬記念基金」と命名。若者の教育に熱心だった若泉教授の精神を学生に伝承するため、講演会開催、懸賞論文募集などの経費に充てている。





京都産業大学世界問題研究所　ニューズレター　第 10 号　2023 年 10 月

発　行　京都産業大学世界問題研究所　京都市北区上賀茂本山　TEL (075) 705-1468
編　集　京都産業大学世界問題研究所所員　久保 秀雄／同事務局　藤本 興子
印　刷　中西印刷株式会社